

進化宣言!
電撃文庫
FIGHTING
フェア
コラボ企画

Here comes the three angels

3天使の JP!

スリーピース

かえる
の
うた

な ぞ の し ん し 編

蒼山サグ
イラスト:ていんくる

私の名は葛切守男。某一部上場企業の総務課で管理職の座に就いている。

週休二日、基本的に残業もない。この時代にあつて、非常に恵まれた環境で職務に従事できている点は自他共に認める幸運だ。信仰心は薄い方なのだが、現状の何一つ不自由ない暮らしに対し、神という存在を認めるのならば常々感謝を忘れてはならないだろう。

強いて自らに問題提起をするならば、齢四十を過ぎて未だ未婚であることだろうか。実際、同期から皮肉めいた軽口で身を固めるよう急かされる場面は多々経験してきた。

しかし、近年の風潮として生涯独身を貫くライフスタイルは日進月歩に社会的地位を獲得しつつあるため、有意義な生活を送る上での障壁となるほどの負い目は感じない。

そもそも結婚に関しては、単純に興味がないのだ。なぜなら私は、幼女以外を愛する術を知らないのだから。

——待つて欲しい。その手に掲げた携帯電話はいったんテーブルに置き、『110』の番号も消して、あと少しだけ私の話につき合ってはくれないか。

認めよう。私は幼女を愛してやまない。だがしかし、それは恋愛——あまつさえ性的な視点など一切伴わない、純粹無垢な美の探求心のみ起因する感情なのだ。週末に美術館へ通うのが趣味、とする人間と、私の根源的な思想は、非常に近いものであると推測する。

響 貫井

動画サイトで「ひびきP」と名乗りオリジナル曲をアップしている少年。潤たちのバンドに曲の提供と指導をする。

そう、私にとって

ことでも、イレギュラーな動作は不審の種に繋がりがねないから極力控えるべきだ。ロボットのようなルーチンワークこそが私の真髄をカモフラージュする鎧となる。

「フツ、フツ、フツ……！」

ベンチを利用し、背筋運動に動かしむ。

顔をあげるたび、フェンスの近くに設置されたプランコが視界に入った。もちろん計算づくで選んだポジションだ。

「そろそろわたしとかわつてー！」

「えー！ もうちょっとー！」

週末の昼下がり。幼女がいない方がおかしいシチュエーション。二台連なったプランコを三人で共有しているのは、公園のすぐ隣にそびえる集合住宅、メゾン・セフィエロで暮らす小学一年生仲良しトリオ、ゆうちゃんとかなでちゃんときよこちゃんだ。

いちいち自分の思想に注釈を入れるのにも飽きてきたが、調べたわけではない。そんな私の信義にもとる越権行為を犯すはずがない。

ただ単に、日々観察を続けているうち偶然聞こえてきた情報を整理したにすぎないのである。燕の巣を覗き込むような無粋は言語道断だが、小鳥のさえずりに対し意味もなく自ら耳を塞ぐ行為もまた不自然であろう。行雲流水。レット・イット・ゴー。ありの、ままの、自分になって。ありの、ままで、幼女を愛でているだけである。一切触れることなく。

そういう意味ではこの趣味、登山に近いものがあるのかもしれない。

「フツ、フツ、フツ……！」

執拗なトレーニングによって得られる運動負荷も含めて、だ。

ああ、しかしひとつ相違点をあげるとすれば時の流

『ルーブル美術館』と『幼女』は同列の言葉なのである。まだ納得を得られないのであれば別の観点からもう一つトピックを設けよう。

自然のサイクルのなかで育つ全ての食物には、旬という概念がある（あらかじめ断っておくが幼女をおいしく頂きたいという主張では断じてない。確かに私の主食は幼女だが、それはあくまでスピリチュアルな意味である）。

実りを迎える野菜や果実によって我々は直接的に四季を感じ、海産物もまたいつ旬を迎え、逆にいつ産卵で身をやつれさせるのか、種によって様々だ。

すべからず、人間という存在も生命である以上、『旬』は存在するはずだ。

それは、いつ何時か。諸説あるだろうが、個人的にイメージするのはジェットコースターのレールだ。最初に上って、あとは落ちるだけ。途中で起伏らしきものもあるにはあるが、あくまで原動力は慣性にはすぎない、と。

以上の論理を以て、私は自らの幼女愛が正当……いや、ごく自然なものであると力強く主張する。

さて、私は現在自宅からほど近い公園に赴いている。目的は、もちろん幼女観察。すわ事案だとおののいた諸兄よ、心配は無用である。私はプロフェッショナルだ。

不測の事態を除き、頑として幼女の半径十メートル以内には身を寄せない。近くで視線を送っただけで通報される可能性があることなど、そんじょそこの素人とは比べものにならないほど深く理解しているのだから。

加えて、双眸を隠す偏光グラスも必携している。普段着では違和感を生みかねないので、服装もストレッチャイツに速乾性のTシャツと短パン。これでどこか

れの残酷さに束縛されてしまうことか。寄せては返す波のような上下運動に身を委ねること数分、ついにゆうちゃんたちとの離別が訪れる。背筋運動が規定回数に至ってしまったのだ。

できるならばもう少し眺めていたい……が、ここで欲に溺れないことが未来への架け橋となる。過ぎたるは及ばざるが如し。三人ともまた必ずこの公園に遊びに来ることだろう。その時まで、さようなら。再会の誓いを、偏光グラスの奥から静かに念じる。

しかしながら、ゆうちゃんたちの親御さんは最近では珍しいほどの放任主義だ。確かにこの公園は非常に人の往来が多く死角もあまりないため、近所でも指折りに安全な場所であるのは間違いないのだが、老婆心ながら不審者に目を付けられはしないか時折心配になる。

まあ、起こってもいいことを案じても仕方がない。もし仮に彼女たちへ急迫不正の侵害が迫るような事態が発生したならば全力で保護に向かうとして、今はひとまず新たな幼女との出合いを期待しよう。

「フツ、フツ、フツ……！」

うつぶせから仰向けに体勢を変え、今度は腹筋運動を繰り返しながら公園の反対側に愛でるべき幼女がいないか神経を研ぎ澄まして探す。

なお、上半身をベンチに降ろしたタイミングで首を傾け刮目すればプランコの方も同時に観察し続けられるのではないかという指摘もあるだろうが、動きにリズムカルさを欠くのでやらない。私はストイックなのだ。

「ム……！」

そうして前だけを見つめていた甲斐あり、私は今再び輝かしい宝石たちと出会うことが叶った。



五島 潤

(通称：潤たん)

引っ込み思案で泣き虫な小学五年生。バンドではギターとボーカルを担当する。音楽以外ではお料理が趣味。

守男's eye

長い髪を片方だけ結わえた、控えめそうな推定小学五年生。

五年生。
「ベンチ、汚れてない？ ……大丈夫そうね、よかった」
気が強そうで、少しおしゃまな雰囲気。推定小学五年生。
「はむ。おひるねにさいてき」
とろんとした目つきが庇護欲をかき立てる、推定小学五年生。
先ほどのジェットコースターの喩えで言えば、ちょうど山の頂点まで上りきった迎いの、美しき三人組。まさに、完熟。秋の豊穣を象徴するかのような、たわわに実った果実である。

らどう見ても週末に運動不足を解消しに来た中年そのものだろう。
もちろん、見た目だけ装っても行動が伴わなければ懐疑の目は避けられない。だから運動もする。念には念を入れて平日も出勤前にこの公園でストレッチャと自重トレーニングをこなしてから、軽いジョギングに出かけている。早朝に幼女と出会える確率は非常に薄いのだが、全ては週末へ向けた布石である。いつもこの公園を根城に運動しているジョギングおじさん、という地位が獲得できればしめたものなのだ。
そんな生活が続けてきた結果、意図せず身長180cm、体重73kg、体脂肪率9%という健康体を付加価値的に手に入れてしまった。自分のルックスにはなんの興味もないのだが、この肉体もまた健全な人間だと周りに認知される『衣装』として役立っているのかもしれない。そのように推測する。
どうだろう。本職の幼女観察家にぬかりはないのである。
その甲斐あつてか、この地で『ライフワーク』を動かしむようになって既に十年以上たつた今も、まったくの通報知らずである。それどころか、幼女たちのママさんとジョギング中に爽やかな会話を交わすことにさえ、幾度となく成功しているのだ。
ちなみに幼女にしか興味がない私だが、その生みの親である存在に対してはこの上ない畏敬の念を抱いている。まだ見ぬ神よりよほど崇め奉っていると云っていい。いわばご神木のような存在だろうか。許されるなら二礼二拍手一礼でもって日々の感謝を伝えたいところだ。無駄なリスクを冒すことになるのでももちろん実行に移しはしないが。
……おっといけない、脳内会話に動しんでいたら予定よりもスクワットの回数が増えてしまった。些細な



紅葉谷 希美 (通称:ぞみ)

強気で行動派な、率先して物事を進めるタイプの少女。3人の中では最も背が高く、バンドではベースを担当。

守男's eye

気が強そうで、
少しおしゃまな
雰囲気の推定小学五年生。

「よし、ここにしよう」

「……………ムム」

ただ一つ、看過できぬ問題がある。三人に付きまとう、あの豆苗系男子は何者だ？

実の兄……いや、その可能性は薄そう。年齢や見た目からして三人娘同士が姉妹であるとは考えにくい。有り得るとすれば誰か一人の兄、といったところまでだろうが、それにしたところで少年と推定小学五年生たちとの間に血のつながりは感じられない。

不審である。小学生を連れ回す少年……紳士道の風上にも置けぬ輩。

「フツ、フツ、フツ、フツ……！」

さらなる人間関係の構築を嫌がるような子たちでは断じてない。

それだけに留まらず、私は偶然耳にしてしまつてさえるのだ。しおりちゃんが勇気を出しきれず引き返した後、

「いっしょにあそびたいのかなあ……」
という、きょうこちゃんの心配そうな呟きを。しおりちゃんとかなでちゃんもまた、もどかしさを満面に顔を見合わせていた。

だが、だからといって、どうしてしおりちゃんを責めることができよう。あの子たちの年代で、単身新たな世界へ扉を開き飛び込んでいくことがいかに困難であるかなど、きつと多くの人間が遠い記憶の中で理解できているはずだ。

それに、勇気が出ない引つ込み思案なしおりちゃんという存在がまた、なによりかわいい。

かわいいは正義である。

故に、しおりちゃんは間違っていない。

典型的三段論法からも、しおりちゃんの正当性は保証されている。

ああ、こんな時ほどどこかしさを痛感させられる場面はない。

ただ、ひとこと。私が双方に「大丈夫だよ」と伝えてあげられさえすれば。

……いや、それも詮無きこと。

おそらく、いや間違はなく、伝わらない。伝わる前におまわりさんと呼ばれる。もし万が一彼女たちが呼ばないでくれたとしても、周囲の人間が不審がつて通報する。

私の意気地が問題なのではない。四十を超えたおっさんと、小学一年生女子との距離は、何もかもが、あまりにも、遠すぎる。

いや、待とう。いささか思考が早急だ。あらぬ濡れ衣で蔑まれるというのは、私自身が何より憤りを覚える不条理ではないか。

なればこそ、あの少年にもいささかの保護観察猶予は与えて然るべきだろう。

ギルティ・オア・ノットギルティ。

——君のロリ、この私が裁く。

「フツ、フツ、フツ、フツ……！」

腹筋運動に捻りを加えながら、動向を見守る。運良くわき腹と合わせ三部位を同じ態勢のまま鍛えられるトレーニング中なので、怪しまれることなく波状的に視線を送り続けられる。

「はむ。ごちそうさまでした」

やがて熟幼女たちは持ち込んだおやつをかわいらしく頬張り終え、一番背の低い子が少年の膝の上に頭を乗せた。説明するまでもないと思うが熟幼女というのは成長曲線のピークを迎えた幼女という意味である。小学校高学年に達した児童を幼女とみなすか否かという問題は長年学術的な諍いが絶えないので有名だが、私の場合は前出の新概念を設けることによって、自らを納得させる分類に成功した。

要はかわいいうちまでが幼女、それ越えたら——言わぬが花。

これでいい。形而上学に囚われすぎでは逆に目が曇る。私はあくまで、現場主義でありたいのだ。

話を戻そう。早速、少年の器を推し量る絶好の機が訪れた。さて、君はどう乗り切る？ 幼女を傷つけることなく、さりとて自らの社会的信用も損なわないといった一つの冴えたやり方、果たして見いだせるかな？ 期待と不安を織り交ぜた私の熱い眼差しを受けたまま、少年は微笑みながら幼女の頭をなでなでし始めた。

——ギルティ。

「……………つ」

無力感に包まれていた最中、小さな希望の光が見えた。しおりちゃんが、くちびるを噛みしめながら一歩前に踏み出したのだ。

「フツ、フツ、フツ、フツ……！」

自然と私のシシー・スクワットにも力が入る。がんばれ、しおりちゃん……！ もう少し、あと少しだけ前に進めば君の世界は彩りで溢れる。幼女と幼女が出会うとき、七彩はその鮮明さを増すのだ。

そう、七歳だけに——。

いや、六歳の子もいるが。

「……………うう」

しかし、応援も虚しくしおりちゃんは足を止め、その場で俯いてしまった。

やはり、難しいか。どうにかして、蚊帳の外からサポートしてやる方法はないものだろうか。例えば匿名の手紙で互いが気に掛けていることを伝えてやるとか……いやいやや郵送したら足が付くし、直接マンションの郵便受けに投函としても、そのシーンを見られたら非常にまずいことになる。

「——ねえ、あなた」

「……………ん、おお」

ボーカーフェイスで困窮を隠してシシー・スクワットに明け暮れていた私だったが、この時ばかりは感嘆の溜息を禁じ得なかった。

推定小学五年生の三人が、しおりちゃんに向けて手を差し伸べたのだ。

ああ。きつと、あの子たちは天使だ。しおりちゃんを救うために、神が使わした天使に違いない。

……だとすれば、なんとということだ。信仰心の薄さにかこつけて、私はとてもない勘違いをしでかしてしまっていたのではないか。

——ナッシング・バット・ギルティ。
考え得る中で最悪の選択をするとは、いきなり失望させてくれる。

白昼堂々、ひざまくら。そしてなでなで。うらやましいにも程がある。

間違えた。やましいにも程がある。あれでは世界の中心で、

『通報して下さあああああ！』

とか叫んでいるのに等しい。いつそ私が直々に匿名で電話してやろうか。

半ば本気でそんなことを思いつつ、腹筋運動を終えて立ち上がる私。

「……………ん」

しかし、このところこの公園に来るたび深刻な懸案事項であった、とある『状況』が、またしても成立してしまっていたことに気付き、私怨……いや違う、国民の義務を果たさねばという気持ちは心の奥の方へと引つ込んでしまった。

「……………ん」

ブランコで遊ぶ三人娘の方を、おっかなびっくり眺める同年代——つまり小学一年生の幼女の存在が目に残る。

彼女の名は、しおりちゃん。三人と同じくメゾン・セフィエロに住んでいる女の子だ。

少し前から、こんな風にゆうちゃんたち三人を遠巻きに眺めている場面に、たびたび出くわすようになった。間違いなく、仲間の輪に入れて欲しいのだろう。

解決方法ならば簡単だ。しおりちゃんが勇気を持って話しかけさえすれば、三人は必ずや曇りなき笑顔で歓迎してくれるだろう。

プロとして見つめてきた私が保証する。ゆうちゃんもかなでちゃんもきょうこちゃんも、閉鎖的になつて

三人が天使なら、おそらくあの少年は、神そのもの。きつと現世に顕現するため、神が選んだ仮の姿なのだ。「——いっしょに遊ぼうって、声かけてみたらどうか？」

「ひう……むり、です……」

天使の一人が「ひとり」という数え方には違和感もあるが他の表現も思い浮かばないので仕方あるまい)、しおりちゃんに神託を授ける。しかし、いくら天の意志であろうとなんの障壁もなく受け入れられる、というわけにはいかないようだ。

それでも、心配はしない。しおりちゃんは既に救われたのだ、人知を越えた運命の輪に。

なぜ、信仰心などなかったはずの私がこれほどまで確信を得られたのか問われたなら、ただ一言こう答える。

だって、天使がかわいいから。



金城 そら (通称:くー)

はむはむして、いつもぼんやり眠そうな子。ドラムのスティックを握ると、きびきびとリズムを刻む。

守男's eye

とろんとした目つきが
庇護欲をかき立てる、
推定小学五年生。

それだけで充分だろう、と。

「——何か歌をうたうのはどうかな？ あの子たちも知っている歌だったら、興味を持ってくれるかもっ」
続けてなされたのは、そんな提案。なるほど、かなり有効な方法に思える。問題は、しおりちゃんがその気になってくれるかどうかだ。

「……………おねえちゃんたちも、うたってくれるならがんばれる、かも」

心配した通り、最初は難色を示していたしおりちゃん。だが、天使たちも歌声を重ねる約束をしたことで、ついに踏ん切りがついたようだ。

『かーえーるーのーうーたーがー』

『きーこーえーてーくーるーよ』

こうして賛美歌が響き、世界は救済の色に包み込まれた。

そうか、これが。これこそが『大いなる福音』と呼ばれる奇跡の音階か。あまりの美しさに、私の心は既にレベル4リミットブレイク寸前だ。

まさか、『かえるのうた』でとめどなく涙を溢れさせそうになる日が訪れようとは、想像だにしていなかった。

『あ、あのっ』

そして、奇跡は具現化する。福音に引き寄せられるように、ゆうちゃんたち三人は瞳を大きく見開きながら天使たちの許へと歩み寄った。

『や、やあ』

満を持して、少年の姿をした神が直々にその唇をほどく。なんと控えめな語り口をなさるお方だろう。少しも偉ぶるところなどなく、むしろ恐る恐るのではないかと思えるほどの柔らかな声に、私の関心もこれ以上ないほど高まった。

いったい私と神との差はなんなのだろう。神は間違はなく、幼女と心を交信させられる。しかし、私が同

じ言葉を発しても、絶対に幼女には届かない。

その差は、どこから生まれたのか。

わからない。わからないからこそ、私の中にふと新たな夢が生まれる。この人生を終えて、いつか輪廻にたどり着けるとしたら。私もあなたと同じように、神になりたい。

神になって、幼女と気兼ねなくお話したい。

さあ、そろそろゆうちゃんたちが、神への祈りを捧げる時だ。どんな言葉で、あの少年にしか見えない現人神は、幼女からの敬虔を一身に受けるのだろう。

『お、おにいさん！』『ふしんしゃ』さんですっねっ！』

……………

どうやら、私はとんだ勘違いをしていたらしい。

あいつ、神でもなんでもないな？

無駄な時間を過ごしてしまった。トレーニングも終わったことだし、さっさとジョギングに移ろう。

……いや、無駄というのは間違いか。今まさに警察に突き出されようとしている愚かな少年という不純物混じりではあったが、今日も六人の幼女を心置きなく愛でることができたのだから。

これからも断じて下手な危険は犯さず、自らの定めた戒律に殉じ、平穏な人生を送っていこうと改めて心に誓う週末であった。

——後日、再び公園に赴くとしおりちゃんがゆうちゃんたちと仲良くブランコで遊んでいた。

あの少年の犠牲も、無駄ではなかったということか。合掌。

-to be Next Stage-

電撃G'sマガジン12月号(発売中)では
〈かえるのうた ふしんしゃ編〉を
掲載です！

さらに
電撃文庫MAGAZINE
Vol.40(発売中)では
水谷悠珠先生が出張中！
このお話のコミック版が読めますよ！

このお話と
つながる2冊も
読んで
くださいね♪

